

結城紬デザインのフォーマル化研究(第3報)

石川 彰* 望月 政夫*

1. 結城

結城紬は着物の最高級品といわれながら、普段着として位置づけられていないため、フォーマルとして着られていないのが現状である。そこで、結城紬のマーケットの拡大を図るため、平成6年度から結城紬のデザインのフォーマル化を策定している。平成9年度は、今までの試織品と作成した図案の中から、コストや手間などの現実的な問題を考慮して、生産に向くものを検討した。なお、今回の報告は最終報告となる。

2. 方法

試織を3点、デザインシミュレーションを5点行った。それぞれを表1、表2に示す。

表1 試織の内訳

	種類	糸使い		織機
		たて糸	よこ糸	
試織1	帯の試織	手紬糸	手紬糸	高機
試織2	付け下げ調訪問着	生糸	生糸	高機
試織3	縮み織りの喪服	ソルプロンを絡めた手紬糸	撚りをかけた手紬糸	地機

表2 シミュレーションの内訳

シミュレーション1	試織2（付け下げ調訪問着）
シミュレーション2	訪問着（よこ総紺）
シミュレーション3	訪問着（よこ総紺）
シミュレーション4	訪問着（よこ総紺）
シミュレーション5	振り袖（たて総紺・よこ総紺）

2.1 試織の1(図1)

平織りと縮み織りを混在させた。また、縮みやすいように途中からたて糸を抜いて本数を減らし、たて糸の密度を荒くした。

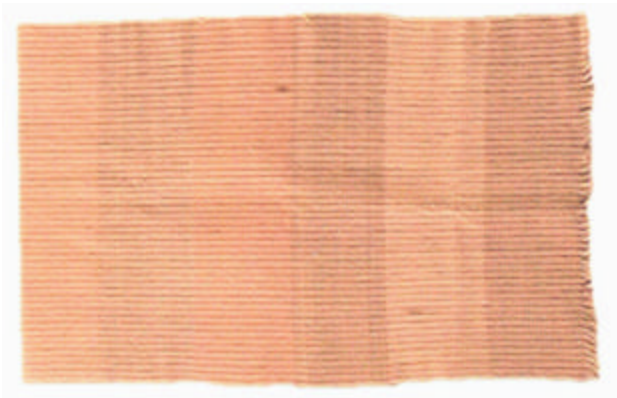


図1

2.2 シミュレーションの1(図2)

付け下げ調訪問着の試織をする際どのような着姿になるのかを事前にシミュレーションした。



図2

2.3 試織の2(図3)

たて糸に手紡糸と生糸を編み合わせるように配し、よこ糸は色を生糸で、よこ縞の箇所は手紡糸を使用した。



図3

2.4 試織の3 (図4)

製織中の手組糸のたて糸切れを防止するため、たて糸に極細のソルプロンをからみ補綴した。ソルプロンは沸点75度の温水に溶けるポリビニールアルコール製の繊維である。縮み織りは、シボ取り・糊付けを行って市場に出される。シボ取りの前にソルプロンを溶解し、取り除くことができるので、製品になった段階では従来の製品と変わりはない。



図4

2.5 シミュレーションの2～4 (図5～図7)

アップルコンピュータのPower Macintosh7500/100 を使ってシミュレーションした。使用したソフトは、アドビフォトショップ3.0である。予め用意した白無地の着物の絵柄のレイヤーを重ね合わせ、レイヤーの描画モードを乗算にして、柄が張り付いたように見えるようにした。



図5



図6



図7

2.6 シミュレーションの5 (図8)

(株)島精機製作所のマイクロデザインでペイントソフトを用いてシミュレーションした。



図8

3. 結果と考察

以上で提示した試織とシミュレーションのうち現実的に生産ラインに乗せられそうなものを考慮してみた。

3.1 シミュレーションの2～5について

絵羽模様であるが、生産可能である。しかし非常に手間がかかる。フォーマル着となり得るが、生産コストなどの厳しい現実を乗り越えるのは容易ではないだろう。

3.2 試織の1について

平織りと縮み織りとが混在していて、製品としては面白いと思われる。たて糸を抜くことにより、しなやかな風合いを得ることが出来た。しかし織りあがった幅が、平織りの箇所と縮み織りの箇所とで不揃いになってしまう。

3.3 試織の2について

手紡糸の凸凹の部分と生糸の平らな部分とで、地模様のようなたて縞が出来た。よこ縞も斜調になるように仕立て方を計算し、縞の位置を割り出して織りあげたので準フォーマルとして着られるものとなった。

糸に手紡糸を使用していないので本暴露織曲とは違ってきてしまう。そこで、手紡糸の代わりに手紡糸を使うことにすれば本暴露織曲の糸を使った新製品ということで製品化が可能である。手紡糸は、他の製品には使えないような太い糸を利用すれば良いと思われる。そうすることで糸の有効利用が可能になる。また、生糸と手紡糸を使っているので手紡糸100%のものよりも価格を下げることも可能である。高機織機で織れば、いっそう価格を下げられる。試織ではよこ縞を配したが、それを無くし、地模様にだけ無地内の方が良いように思われる。

3.4 試織の3について

製品としては問題はないが、たて糸の補糸のために絡めたシリブロンが製織中に抜けると、つなぎ直すのが非常に困難になってしまう。この方法はかえって手間を増やすだけになってしまうので生産は向かないと思われる。

4. 結言

普及着とされている紬と、フォーマルという全く正反対のものを結びつけようというかなり大きな障壁のある研究であったが、デザインという側面から見れば、紬のフォーマル化も策定の余地があると思った。しかしながら、先染め織物で絵羽模様を生産しようとする、技術的には可能であるが、やはり後染め織物よりは見劣りがして、なおかつ手間がかかり高額になる。それでは商品としては無意味であると思った。

結成曲をフォーマルとして販売した場合、出来るだけ安価に、見劣りがしないものという前提であるなら、地模様を取り入れた無地の着物にするのが良い結果が得られるとの結論に至った。

試織の2は生糸と手紡糸を使用するので価格も下がり、ある程度の光沢も出る。また、本暴露織曲の糸を使用しているという付加価値も付けられる。柄のない無地の着物ではあるが、製造から販売までを考慮したトータルデザインを行った。試織の2が生産する際に生じる現実的な問題一歩対応できるものだと考える。

結成曲デザインのフォーマル化研究は終了し、報告もこれで最後になるが、製品と成り得そうな試織の2については業界との共同研究として引き続き研究する。